

Burkard Sampler による 2005 年花粉飛散数の簡易算定法

○ 齋藤明美¹, 岸川禮子², 児塔栄子², 轡田和子¹, 高鳥美奈子¹, 石井豊太¹,
安枝浩¹, 秋山一男¹, 西間三馨²

(¹ 国立病院機構相模原病院臨床研究センター,

² 国立病院機構福岡病院内科・アレルギー科)

【目的】花粉飛散数を評価する方法として我が国では簡便な重力法 (Durham 法) が普及している。一方欧米諸国では原理的に優れた体積法 (Burkard 法) が普及しているが、本法は繁雑で時間がかかる。我々はこれまでに Burkard 法において全視野計測と簡易算定法のオランダ方式、PAAA 法により花粉飛散数を比較検討し、3 種類の算定法による測定値の間には良好な相関が認められたことを報告した。しかし花粉飛散数の少ない時期や、総飛散数の少ない花粉においては相関が低く、さらに検討する必要性も認められた。そこで Burkard Sampler による飛散花粉数の簡易算定法を更に検討し、どの程度まで簡易化することが可能か、またその有用性を評価した。

【方法】2005 年スギ花粉の飛散期間を対象に、Burkard 法はオランダ方式 (光学顕微鏡 100 倍で中央とその 3mm 上 3mm 下 3 本のラインを計測)、PAAA 法 (400 倍で中央 1 本のラインを計測) を検討した。また Burkard 法 (コ/m³) と Durham 法 (コ/cm²) による測定値を比較検討した。

【結果】本年度はスギ、ヒノキ花粉飛散数が非常に多く、計測には多くの時間を費やした。Burkard 法のオランダ方式 (100 倍) で計測した 3 本のラインそれぞれから算出した花粉飛散数の間には非常に良好な相関が認められ、PAAA 法による花粉飛散数との間にも良好な相関が認められた。また Durham 法との間にも有意な相関が認められたが、その相関係数はオランダ方式で算出した方が高値であった。

【結語】Burkard 法における簡易算定法の有用性が認められた。スギ、ヒノキ以外の花粉についても報告する。